

若い頃は、先のことなど考えない。美術短大で学んだ後、お笑い芸人をめざした。6年間活動したが売れず、区切りをつけた。

そこから陶芸の道へ。小さい頃からものをつくるのが好き。短大で陶芸に触れ、心弾んだことを思い出した。滋賀出身だったこともあり、信楽の窯業技術試験場で研修生として1年間陶芸を学び、150年ほど続く窯元に就職。土練りなどの基礎から展示まで、4年間必死で働き、多くを学んだ。

独立後、世界各国の陶芸家が集まる自由な創作の場「陶芸の森アーティスト・イン・レジデンス」に2カ月滞在した。1日に何百もの器をつくる職人の世界と異なり、アートとしての陶芸に刺激を受け、自分に何ができるか真剣に考えた。

自分は何事も身につくのが遅いタイプ。今から伝統技法で器をつくっても、早くから活動している作家には追いつけないかもしれない——「練り込み」の技法に出会ったのは、そんなとき。色の違う土を重ねて、金太郎飴の要領で模様をつくり、器やオブジェに練り込む。手間はかかるが、花や動物などの複雑なモチーフもできる。これは自分の武器になる、と感じた。

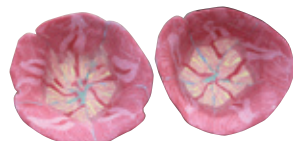
自分の感性でつくったものが受け入れられるのは、素直に嬉しい。思えば、芸人時代はどこか無理をされていて自分を出せなかった。陶芸では、自分が良いと思ったものを良いと思ってもらえる。それが楽しい。

今興味があるのは、作品の見せ方や空間づくり。例えば、子供を対象に作品に触れられる展覧会を開きたい。陶芸展では、親が子供に「触っちゃダメ」と止めるのをよく目にする。でも、子供たちにこそ、本物の作品に触れてもらいたい。創作過程をきちんと説明すれば、大切に扱ってくれるはず。もし割れても、そこから学べることもある。大人向けにも、単に作品をつくって並べるのではなく、空間づくりに合わせた作品をつくりたい。作品のある空間でどんな楽しみ方ができるか、プロデュースしてみたい。

もし向いていなかったら、やめよう。そんな気持ちで信楽に来て10年。一度もやめようと思ったことはない。料理を引き立てるのが器、というのも正しいが、この器を使いたいからこの料理、このカップでコーヒーを飲めば一日頑張れそう、そんなふうにする人の生活の楽しみを広げられるものを、つくり続けたい。【[窪](#)】

ものづくりの その先へ

高橋由紀子 陶芸作家



Yukiko Takahashi

たかはし ゆきこ

1981年近江八幡市生まれ。嵯峨美術短期大学でテキスタイルや陶芸、金工などを学び、2002年卒。吉本総合芸能学院(NSC)25期生として、コンビを組んで6年間活動。信楽に移住し、信楽窯業技術試験場での研修を経て、窯元で4年間勤務後、独立。色土や土本来の色の違いで多様な模様をつくり、器やオブジェに練り込む「練り込み」という技法を用いて作陶。独特の作風にファンも多く、全国で個展を開く。鳥や魚、花をはじめ、信楽焼の狸等の複雑なモチーフも得意とする。

https://www.garow.me/users/yukiko__takahashi/1955914856

季刊 [やく] March 2018 | No.34

C O N T E N T S

02 Person 人・明日をつくる

ものづくりのその先へ

高橋由紀子

03 [鼎談] 基軸を探る

技術継承と人材力強化を考える

藤田玲子／守島基博／中村 肇

20 オビニオン

技術と人材への視点

経営・組織力

「スピードの時代、臨機応変なネットワーク型組織へ」堀 義人

技術立国

「エコシステムのオープンイノベーションに挑め」元橋一之

人材育成

「プロ経営者が少ない日本、『選択と集中』でリーダーを育てる」鈴木貴博

原子力

「『原子力全体がわかる』人材育成が急務」宇埜正美

29 旬発 NIPPON

400年の伝統を次代へつなぐ——みなべ・田辺の梅システム

33 かんてん FOCUS

変わらぬ使命のために、 変わり続ける

高市和明

38 現場力 最前線

社会のライフライン・大動脈を守るために継承する